

鎌倉古道

なごやの

をさがす

池田 誠一

【6】

古渡から御器所へ…再び、古代道路を追って

1 古渡河を渡る大道

14世紀の古文書に、「古渡河」という名が出ているものがあります(粟田家古文書、文献①より)。1313年、大宅郷の荒地1町を売却した時の文書では、その土地の四至(四方の限界)を、東：於津開堤、南：古渡河、

西：同河、北：同河、

としています。また1337年、古渡橋詰の3反240歩の土地権利放棄の文書では、その四至を、東：於津堤崎、南：同堤、

西：古渡河、北：大道、

としました。ここには「古渡橋」とか、街道を意味した「大道」という言葉も登場します。これらから、当時は、①古渡河という川があって相当蛇行していた、②大道は古渡橋を渡り東西に通じていた、ことなどが分かります。(図1)

この古渡河を熱田台地の東西どちらとみるかは決定的にはいえませんが、海から川へと移りつつあった東側の低地とみるのが一般的でしょう。今回は古渡から東へ、古くは海の入っていたという低地を通して、その先の御器所台地に向かう道を探ります。

2 精進川の低地を越えて

(1) 海路か陸行か

古渡の東側の鎌倉街道には、まず、海か陸かという問題があります。この区間は昔から、海が残っていて渡しがあり船で対岸の御器所台地に向かったとする説が多いのです。たしかに海面が高く、あるいは堤防の無い古代には、そのような状況があったかもしれません。

しかし古渡の東の低地部は標高が4～5mあり、また付近の低地部には古代の条里制の跡が指摘されています(文献②等)。さらに前述のように「堤」ができ、「古渡河」や「古渡橋」があったということから考えても、鎌倉街道の時代には古渡の付近には、もう海は無かったと考えられます。従って、街道は陸地化した土地を進んでいたと見ることができそうです。

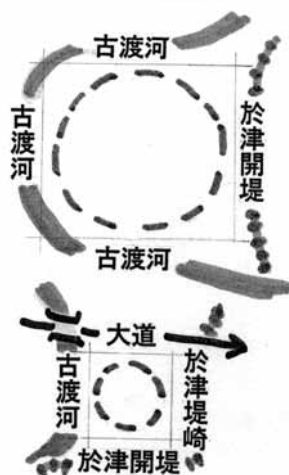


図1 文献からみた河や大道の位置関係

図2 露橋から古渡を通じて御器所に向かう直線(M24)



(2) 再び直線道路

今の東別院交差点の少し東。坂を下ったところに、南に入ってすぐ曲る細い道があります。東にわずかにくねりながら300^{メートル}弱続いており、明治時代の地図でも確認できます。その道は実に、前々回古代道路跡と想定した露橋からの直線を東に延ばした線上とみることができるのです。線は、鎌倉街道跡とされる山王稲荷の北側を通っていることから、この線上の道は古道と関係ありそうなが分かります。(図2)

もちろん、これが古代からの道であることを説明するものは他にはありません。しかし気になることは、この線がさらに東に延びており、東西・南北に区画整理された名古屋には珍しい斜めの道が御器所台地を上りさらに先の石仏まで続いているのです。そしてその一部は古い「字」の境にもなっています。これ以上この問題を追う余裕はありませんが、名古屋を横断する長い直線道路には、なにか歴史のロマンを感じさせてくれます。

(3) 御器所台地

低地を渡った東側は御器所台地です。この台地上にも史跡は多く、古くから隣りの熱田台地と密接な関係があったと考えられます。そして7世紀後半にはすでに、今回訪ねる極

楽寺や石仏の観音寺など(いずれも廃寺)の大寺ができる条件が整っていました。そして室町時代になると御器所東、西城を始め、高田城、大喜城など南北に城が並ぶ戦略上の拠点地域になっているのです。

この台地の特徴は西側に豊富な地下水脈のあることです。もともと精進川の川筋は地質的には大首根凹地といい、大河のあった跡といわれます。そのせいでしょうか、台地の西には吹上とか滝子とか水のあったことを示している地名が残ります。

(4) 鎌倉街道のルート

古渡からの鎌倉街道は東から南まで幾筋も想定できます。今回紹介する東に向かうルー

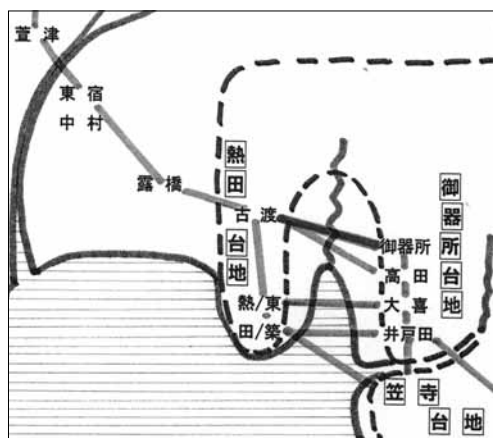


図3 鎌倉街道のいくつかのルート(太線部が今回のルート)

トはそのもっとも北側のルートといえるでしょう(図3)。

そのルートは、古渡を出て古代道路と想定した道路に沿ってまっすぐ低地部を渡り、御器所台地に着いたところで南に向きを変え、台地の山裾に沿って南の高田に向かった、と考えられます。

3 鎌倉街道を探す

それでは古渡から東に鎌倉街道の跡を追ってみましょう。地下鉄東別院駅の2番出口を出て幹線道路(山王線)を東に進みます。

100^{メートル}ほど行くと右に入る細い道があり、すぐ左に曲っています。これが前述の古代道路跡(?)の延長上の道になります。道はくねくね進み新堀川の川端通で終わります。川を渡るため右手の向田橋に迂回し、信号を渡って中央線のガードをくぐります。この先は都島商店街で、道は今ではまっすぐに整形されています。東に進むと、次の信号の1本手前の道が明治の頃の精進川の川筋になります。まっすぐ進み高速道路の通る幹線道路(東郊線)を渡ります。



古代道路跡の延長上の道路



▲精進川は改修され、運河化されて新堀川に

御器所西城跡の石垣(ここはあとで積まれた?)▶



JR中央線をこえて、さらにまっすぐつづく道



島退の旧家。むこうの道路東郊通から1〜2^{メートル}上っている

進んできた道は道路を越えてさらに東に向かっており、街道はその山裾で向きを南に変えたと考えられます。ここでは街道の探索から少し離れて、御器所台地西側の中世までの遺跡を訪ねてみましょう。

歩道を北に少し行くと天池通です。このあたりから東北は地盤が少し高くなっています。昔は島退と呼ばれ、「島の木」とも書かれたように、付近が海だったときも島になっていた土地といえます。天池通の商店街を東に進みます。次の信号を越えて2本目を右に曲ると大きな石垣が目に入ります。ここは明治以降尾陽神社になっていますが、元は御器所西城で、1440年頃、佐久間家勝によって築られました。そして戦国時代三英傑に仕えた佐久間一族の拠点となった城跡です。石垣に沿って南



側の正面から神社に入ります。台地の西北にせり出した、城郭としては絶好の立地で、右手奥には空堀が残ります。

神社の正面の道を取り、すぐの道を左、右と曲って南にゆるい坂を進みます。左手には佐久間氏が開いた御器所八幡宮の森が見えます。正面は村雲小学校です。学校からその西一帯は古代の極楽寺の跡といわれている所で、戦前学校の建設の時には多くの古代瓦が出土しました。しかしそれも戦災でほとんど残りませんでした。学校の手前で西に曲り、坂を下ると浄元寺があります。前は急な坂道で谷状になって西に下っています。寺は戦国時代の創建で、寺の西には長寿だった媼の墓とされる姫塚があります。寺の正門を出て正面の階段の道を上ります。少し行き今度は階段の道を下ります。御器所台地の凹凸をよく現している所です。下った所は台地の取りつき部になり、側の民家では昔古い船が出土し、ここは海だった時の船着場ではないかといわれています。

南に1本行き、左に曲がって再び台地を上ると右側に西福寺があります。9世紀創建と



御器所台地の上の西福寺。昔はすばらしい景色だった



御器所台地の山スノの道



中代極楽寺があった近くの浄元寺

され、戦国時代佐久間信盛が現在地に移したといえます。御器所台地上の景色のいいところです。寺の前を南に坂を下り2本目を右に曲ると台地の麓に下ります。鎌倉街道はこの付近の麓の道を南に向かっていたのではないのでしょうか。もう少し行くと高田で、その手前の幹線道路の東に市バス停があります。

4 もう一つの鎌倉街道

これまで辿ってきた鎌倉街道は、名古屋の西北の萱津から中村、露橋、古渡と辿って御器所台地に着きました。しかし戦国時代には、もう一つのルートがあったのではないかと考えられます。それは、清須を経由した道です。

清須城ができ、そのあとの1530年頃には織田信秀が那古野城を拠点にし、さらに古渡にも築城しました。このため清須から名古屋台地への道が利用されるようになったと考えられます。この道を使って、清須から那古野城へ。那古野城からは古渡に寄らず短絡して直接東南に向かって七本松付近(中区)を通り、今回通った御器所台地の西の道に合流する道ができたのです。御器所西城などができたのもこの道と関係がありそうです。

名古屋城築城前の名古屋の地図に載っている枇杷島から那古野城下を通過して七本松に向かう道は、そんな鎌倉街道の変形した姿だったのではないのでしょうか。

〈主な参考文献〉

- ①市史編集委員会「新修名古屋市史第2巻」(1998、名古屋市)
- ②水野時二『尾張の歴史地理』(1959、名古屋鉄道K K)